
【特集】 D. グレーバーと自由への展望——〈労働〉と〈抵抗〉をめぐって (2)

特集にあたって

鈴木 宗徳

この特集では、前号にひき続き、デヴィッド・グレーバーが展望した自由や解放への道筋について具体的な事象に即して論じてゆく。前号のくり返しになるが、まずごく簡単にグレーバーの紹介をしておきたい。

2020年9月2日、デヴィッド・グレーバーは59歳の若さで急逝した。大著『負債論』を世に問うてからわずか9年、彼は日々旺盛な活躍を続けるなかで旅立って行ってしまった。

グレーバーは、現在もっとも注目される人類学者であり、アナキストの立場からグローバル・ジャスティス運動やオキュパイ・ウォールストリート運動などを組織した活動家としても知られている。『アナキスト人類学のための断章』（原著2004）、『負債論』（同2011）、『官僚制のユートピア』（同2015）、『ブルシット・ジョブ』（同2018）などの主要著作をはじめ、今もつぎつぎと訳書が刊行されている。

グレーバーはニューヨークの労働者階級の家産に生まれ、父はスペイン革命に加わった経験を持ち、母も労働組合運動に参加していたという、ラディカルな環境のなかで育った。シカゴ大学のマーシャル・サーリンズの指導の下、マダガスカルフィールドワークに基づいた研究で博士号を取得している。グレーバーはマダガスカルで、地方政府が機能しなくなってもなお人々が直接民主主義によって社会を成り立たせていることを目の当たりにし、人類学とアナキズム思想を接合させてゆく。彼は『負債論』のなかで、マルセル・モースの互酬性の理論を受け継ぎながら、彼のいう「基盤的コミニズム」について説明している。グレーバーにとってコミニズムとは、隣の人に「レンチを取ってくれ」と頼むような見返りを期待しない助け合いを意味し、資本主義社会を含むあらゆる場所で日常的に行われているものとされる。これは「各人はその能力に応じて貢献し、その必要に応じて与えられる」という意味でのコミニズムに他ならないが、生産手段の所有とは無関係で、むしろクロボトキン以来の「相互扶助」を言い換えたものと考えてよい。

前号と同様に、こうしたコミニズムの実現を垣間見せようとする「抵抗」運動や日常的な「抵抗」の実践を紹介し分析することが、本号に収められた各論文の基調となる。ただしその多くは、この特集のもう一つの主題である「労働」や「労働者」にも焦点を当てるものである。

グレーバーの代表作の一つ『ブルシット・ジョブ』は、それが無ければずっと労働時間が減少していたはずの無意味な仕事＝ブルシット・ジョブが膨大に存在する事態を的確にとらえ、話題と

なった。すでに『アナキスト人類学のための断章』においても、彼は「いったいどの仕事が必要で、どの仕事が必要なのか？」と問いかけ、働きすぎを批判している。また、ブルシット・ジョブと対比されるエッセンシャル・ワーカーの多くが報われない低賃金労働であることがコロナ禍で注目されたが、グレーバーは、社会的価値が高い労働ほど報酬が少ないという転倒した事態がなぜ起きているのかと、問うている。

グレーバーは、フェミニスト経済学者であるナンシー・フォールブルの言葉、「実質的に、いかなる労働の形態であっても、結果として他者のニーズを満たすのに役に立つ活動になるという意味で『ケアリング』として記述することができる」を引いている（『ブルシット・ジョブ』酒井隆史・芳賀達彦・森田和樹訳、岩波書店、301頁）。労働価値説の伝統が労働の「生産的」な面ばかりを強調していたのに対し、ほとんどの労働者階級が行っている労働が「ケアリング」の側面を持ち、地下鉄職員の仕事にも他者に対する解釈労働、共感、理解が含まれていることを指摘する。同書で彼は、現代の労働が生産主義的な観念に、すなわち労働は自己目的的で、道徳的で、自己犠牲的なものであるという観念にとらわれるようになってきていると論じ、そこからの解放を「ケアリング」概念やベーシック・インカムに託すのである。

前号の「特集にあたって」でも指摘したように、グレーバーはオキュパイ運動のなかに生まれた相互扶助の実践を「ケア共同体」と言い表し、『ブルシット・ジョブ』ではこの運動を「ケアリング諸階級の最初の大反乱」であったと評価する。彼の思想と実践は、つねに蜂起せんとする労働者とともにあった。本号に収められた各論文はこうしたグレーバーの眼差しを引き継ぎ、「ケアリング階級」による運動や実践を分析してゆく。

（すずき・むねのり 法政大学社会学部教授／法政大学大原社会問題研究所副所長）